

良心の在処

一年三組 根上 莉緒

「良心に恥じぬ生き方」とは、一体何なのだろうか。これは、私がこの本を読んで一番に頭をよぎった疑問である。「海と毒薬」は、戦争末期、九州大学附属病院で実際に起こった「九州大学生体解剖事件」をもとに執筆された、遠藤周作氏の代表作である。

新宿から電車で一時間の西松原住宅地に妻とともに引っ越して来た「私」。気胸持ちの「私」は治療を受けるため、勝呂という医者を訪ねる。無口で変わり者の勝呂に不信感を持つ「私」だったが、ある日勝呂を知るという人物に、かつて彼が九州大学で起こった米軍捕虜の解剖事件に関与しているという、衝撃的な事実を明かされる。ここでいう「解剖」とは、無抵抗の人間を生きたまま解剖するという、我々の倫理規定に反する行為のことであり、従来用いられてきた、既に死んでいる生物体に対する「解剖」とは全く別物である。ではなぜ、勝呂はこのような到底許されるべきではない行為に加担してしまったのだろうか。物語は勝呂が行為に及ぶまでの過程が、勝呂自身の視点で語られる。

私も初めはこの物語における「私」と同じように、勝呂に対して言い表すことのできない不気味さを感じていたのだが、読み進めていくうちにその印象は一変する。勝呂の同期、戸田の登場である。彼は、この物語の登場人物の中でも、ひととき異彩を放っている。第二章で彼の過去が明かされると、私は彼に嫌悪感を抱くほかなかった。模範生のフリをしながらその実、裏では人妻である従姉と姦通したり、妊娠させた女中を墮胎させたりするなど、数々の罪を戸田は犯していたのだ。しかし、これだけの罪を犯しておきながらも、戸田には呵責を感じている様子は全くない。それは、彼がああ解剖事件に参加した後も、変わることはないのである。「醜悪だと思ふことと苦しむことは別の問題だ」これは、自分の行為に対して良心の呵責を感じることができず、ただただ彷徨する戸田の心情を表す言葉である。そんな自分を不気味に思い、あえて生体解剖に参加することで良心の在処を探そうとする戸田を、私は歪だと思った。周囲に流され、何となく参加してしまった戸田とは大きな違いがここにはあったのだ。

私はこれまで戸田の人間性を否定してきたのだが、彼の手記に記されていたある言葉によって、自分の本質にも彼に似たものがあるということに気づかされた。「ぼくはあなた達にも聞きたい。あなた達もやはり、ぼくと同じように一皮むけば、他人の死、他人の苦しみに無感動なのだろうか。多少の罪ならば社会から罰せられない以上はそれほどの後ろめたさ、恥ずかしさもなく今日まで通してきたのだろうか。」確かに私達は、罪を犯せばある程度の罪の意識を感じる。私は、今までのこの心のありようを良心の呵責によるものだと信じて疑いもしてこなかったのだが、本当にそうなのだろうか。実は私達が恐れているのは、世間や社会からの罰に対してだけなのであって、自分の良心に対してではないのではないだろうか。私自身、もし犯した罪が罰せられないならば、その後も贖罪の念を抱きながら生き

続けることは難しいと思う。それはまるで、悪戯がばれなくて安堵している子供と同じである。つまり、このような考え方は誰でも持ちうるものなのだ。「良心の喪失」は、まさに私達の足下にまで迫ってきている。

私がこの本を読んで学んだことは、私達は自分の中に「良心」を確固たるものとして確立せねばならないということである。良心の不在を自覚し、苦悩していた戸田。作中では、彼は己の良心の在処を見つけ出すことができなかった。己を正しく導いてくれる「誰か」も、戸田にはいなかったのである。

夏川草介氏は、この作品を勝呂と戸田の行為を非難するだけの単純な読み方をするのではなく、彼らの中にいる自分自身を見つけ、良心の在処を改めて問いかけるきっかけとしてほしいと綴っている。

現代は、多種多様な善と悪が渦まく大海である。私達は生きている限り、その波に翻弄され続ける運命にあり、同時にその流れに抗う術を模索する探求者でもある。この広い海で自分を見失わずにいられるライフラインこそが「良心」なのである。その「良心」を喪失してしまうと、私達は戸田のように周囲を狂わす毒薬と化してしまうだろう。今、私達に求められていることは、周囲の悪い流れを断ち切ることができる人間になること、そして、自分自身が毒薬とならないように、常に己を省み続けることである。

どんな人間であれ、私達は皆、良心を持っている。戸田のようにその在処を見つけにくい人もいる。その在処を見つけ出し、自分の中に確立していくことが私達が生きていく上での課題なのではないだろうか。また、私は、戸田のような良心の在処を必死に模索する者を正しく導く「誰か」になりたい。私にとっては、それこそが「良心に恥じぬ生き方」なのではないかと思うのだ。

(『海と毒薬』 遠藤周作著 講談社文庫)